

## 故 名 誉 員 池 田 嘉 六 氏 を し の ぶ



土木学会名誉員 池田嘉六君 本年4月1日、東京都上目黒の自宅において瀕死として長逝された。齢 81 の寿を全うせられたとはいえ、土木学界のため長老の一人を喪ったことは誠に哀惜の至りにたえない。

同君は埼玉県児玉町の旧家に生れ東京四中・一高・東大の秀才コースを進んで明治 39 年7月工学部土木工学科を卒業し、ただちに鉄道省作業局に入って富山建設事務所へ配属された。時あたかも日露戦争終結の翌年で戦時中止されていた鉄道建設工事も各所に再開され、池田君は北陸線の未開通部で最も難工事といわれていた親不知、子不知の現場において土木技術者の第一歩を踏み出した。翌 40 年、鉄道は国有に統一せられ鉄道新線の建設は全国的に最盛期に入り北陸線も突貫工事によって3年ののち無事全通したのであるが、この工事は池田君初陣の功に帰するところ大なものがある。同 43 年3月、池田君は鹿児島建設事務所へ転動し、今度は有名な矢嶽ずい道をふくむ人吉〜鹿児島間の大工事と取り組み苦心幾年ののち、これも立派に成功させた。

大正 8 年 9 月、同君は鉄道院建設局工事課の次席技師に抜擢されて初めて中央の人となり、多年の現場経験をいかして全国各建設事務所より提出される工事申請書類の審査にあたられたが、越えて同 12 年6月、欧米各国に出張を命ぜられ、先進諸国を巡遊して十分新知識を吸収された。同 13 年 12 月、帰朝早々の同君は鉄道省東京建設事務所長に任ぜられた。同事務所は当時日本最長の清水ずい道を含む関東一円の建設工事を管掌する最右翼事務所であったが、ここでもいろいろ記憶すべき功績を残した。

越えて昭和 2 年 3 月、同君は建設局計画課長に転じて中央の枢機に参与することになり何人の眼にも公正適切に職務を執行されたのであるが、大臣の交代にともない4年7月、方面違いの東京第二改良事務所長に転出を命ぜられ、東京西南半部の複雑な改良工事を担任することになった。

昭和 6 年 7 月、鉄道省技術陣に画期的大異動があって池田君もその際いったん退職した。これは部内でも意外とするところであった。しかし間もなく時節到来して同年 12 月、鉄道省建設局長の要職に返り咲き多年の宿望を達して同 9 年 8 月正式に退任されたのである。

土木学会員としての池田君は昭和 6,7 年常議員となり、また昭和 35 年 7 月、永年の功績によって名誉員に推薦された。

筆者は同君とは大学の同窓生として3年間を並べ、鉄道に入っても 25 年間同僚として密接な関係を保ち、昭和 6 年7月、同時に退官して、筆者はただちに関西に去ったので以来 32 年間、交情は昔日のほどではなかったとはいえ、今日生残りのうちでは彼をよく知る者の一人であると思う。

池田君は一言にしていえば温厚篤実の常識人で余り人中に出しゃばらない質の人であった。もちろん逸話らしいものはないが、しかし、しんに強い所があった。人には至って親切でいねいでよく部下の面倒を見たから上下の気受けは上々で、いわゆる嘸みしめるほど味の出る人柄であった。

晩年不幸にも足を病んで歩行困難となり長く引きこもっておられた。昨年 5 月、草間 偉君ほか 3 人の同窓者が会合のあと打ちつれて同君の病床を見まった。思いのほか元気で少時間ではあったが愉快に歓談して帰ったが、帰途皆であの調子ならまだまだ長生きするぞと話しあったほどであった。

池田君の死はわれら友人にはいい叫べぬ哀感をそそったが、ひるがえって考えると同君には内助の誉れ高かった外子夫人健在し、一人息子の俊雄君は新進の国鉄技師として父君の跡を継ぎ、家庭的になんら思い残すところはない。特に死に際して、いささかの苦痛もなく眠るがごとき大往生を遂げたのは、むしろ幸福といわなければならない。われらもかくあれかしと願いつつ静かに故人の冥福を祈る次第である。

(1963. 5. 5)

【名誉員 国鉄交通科学館長 橋本敬之・記】